

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：32639

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25510014

研究課題名(和文) 保育におけるケアリングの関係論的構造に関する研究

研究課題名(英文) Study on the structure of caring in early childhood care and education

研究代表者

岩田 恵子 (IWATA, Keiko)

玉川大学・教育学部・教授

研究者番号：80287812

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、保育において多様に創発するケアリングの関係構造を明らかにすることを目的とし、文献検討とフィールドワークを行った。その結果、(1)子どもたちのモノへのケア、モノとの対話の世界を大切にすることが、子どもがケアする世界をケアする基盤となること、(2)保育の場での子どものモノ的なケアが人的なケアにつながる多様なプロセスが存在すること、(3)子どもがケアする世界を大切にした二人称的かかわりによる協働的に未知なる世界を知るプロセスを見いだした。

研究成果の概要(英文)：This study was intended to clarify the structure of caring that has emerged in the field of early childhood care and education. Caring in early childhood care and education was explored through a qualitative analysis of various episodes and theoretical considerations. The results were as follows. The base of early childhood care is the way that children learn to take care of the world through dialogues with materials. Within early childhood care and education, children's dialogues with materials consist of various processes leading to peer relationships and a learning community. There are processes of learning about the world through the second-person approach.

研究分野：発達心理学

キーワード：ケアリング 保育 子ども 二人称的アプローチ かかわりあい モノとの対話

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初の背景として、まず、N. ノディングズ(1997)のケアリング論があげられる。ノディングズは「人間存在として、わたしたちは、ケアし、ケアされたいと思っている」とし、「ケアリングの関係は、その最も基本的な形において、二人の人間、つまりケアする者とケアされる者とのつながり、あるいは出会いである」と述べている(ノディングズ, 2007)。ケアリングは、ケアをする人からケアをされている人へという一方向的な関係だけを意味するのではなく、ケアする人とケアされる人との呼応しあう、双方向的な関係を意味している。

林(2007; 2008; 2010)は、ケアリングのこの呼応しあう関係性に注目し、教室の授業場面ではいわゆる問題行動によって担任教諭にとっては気になる存在である児童が、幼稚園における幼児との出会いの中では絶妙にケアをすることを関係論的に分析している。そこから見えてきたことは、児童が幼児との出会いの中で自然に思わずケアする関係を媒介に、児童はクラスの中でも新たな関係を築き、それが児童自らのケアにもつながっていることであった。すなわち、ケアすることによって、ケアする側もまたケアされている、新たな学びあう関係性が浮かび上がった。

宇田川(2008; 2009)は、保育実践の中で自閉的な傾向をもつと思われる幼児と出会い、その子どもへのケアを試みながらも出会えない葛藤の中で、ふとその幼児の行為の模倣をしたとき、幼児が保育者である宇田川を気にかけてはじめる場面を丁寧に分析している。ここで生じたことは、幼児がケアされることによって、他に関心がひらかれる、すなわちケアしはじめることである。

このようにケアを关系的なものとしてとらえていくとき、保育の場におけるケアリングとして、子どもと保育者の関係だけではなく、子ども同士でのケアリングにも注目する必要がある。岩田(2011; 2012)は幼稚園における仲間関係を関係論的に分析する中で、けんかをはじめとする葛藤や排除から生まれる「拒否」を経験することが、お互いに異なる他者や異なる意見を気かけながら新たな協働的な関係を作り出すことにつながる可能性を指摘している。

一般的に、保育において「ケアリング」といえば、保育者の援助行動としての「ケアすること」を意味するとされがちであった。しかし、ここまでに見てきたように、「ケアリング」というのはケアする側とケアされる側の相互交換的関係をさし、ケアする側はケアすることでケアされ、ケアされる側はケアする側をケアしている。これを保育の場に移し替えると、保育者は保育する(子どもをケアする)ことを通して子

どもからケアされていることでもある。

さらに、ノディングズによれば、ケアする側とケアされる側があらかじめ二者関係として存在していることが前提となっているが、保育現場では、子ども同士が相互にケアしケアされている相互関係もよくみられる。

ケアしケアされる関係は保育現場の中で多様に創発し変容する。このような保育におけるケアリングの関係論的構造を解明し、説明する理論を構築することが必要とされていると考えられることから、本研究に取り組むこととなった。

2. 研究の目的

本研究は、保育において多様に創発するケアリングの関係構造を明らかにし、それを説明する保育ケアリング論を構築することを目的とした。具体的には下記2つの視点によりこの問題にアプローチした。

(1) 保育の場におけるケアリングに関する理論的検討

新たな保育ケアリング論の構築を目指し、ケアリング理論の検討と保育における具体的エピソードの検討とを往復しつつ理論的考察を進める。

(2) 保育の場におけるケアリングの関係構造を捉えるためのフィールドワーク

保育の場における、教え合い、学びあいの様相、さらには、ケアする側・される側の立場を超えたかわりあいを捉えるため、複数の保育の場におけるフィールドワークを行う。

3. 研究の方法

本研究の方法は、以下の2つであった。

(1) ケアリングをめぐる理論的検討

ケアリングと関係する諸理論を検討するとともに、保育の実践エピソードをケアリングの視点から読み解くことによって、保育におけるケアリングの関係論的構造を解明することを試みた。

(2) ケアリングに視点をあてたフィールドワーク

保育現場におけるケアしケアされる関係の多様な創発、変容をみるために、イタリアのレッジョ・エミリア市の保育、鳥取県の仁慈保育園、赤碕保育園の保育、佐賀大学文化教育学部附属幼稚園での観察・インタビューを行なった。

4. 研究成果

本研究の主な成果として、(1)子どもたちのモノへのケア、モノとの対話の世界を大切にすることが、子どもがケアする世界をケアする基盤となること、(2)保育の場での

子どものモノ的なケアを大切にすることが人的なケアにつながる多様なプロセスがあること、(3)子どもがケアする世界を大切にしたい二人称的かわりによる世界を知るプロセスがあること、の3点があげられる。

(1)子どものケアする「モノとの対話」の世界の発見

保育においてケアを考えると、保育者は人へのケアに目をむけがちである。しかし、そこには、モノへのケアも存在する。また、子どもがモノとかかわるとき、子どもはモノに心を寄せ、モノと対話をしている。しかし、子どもとモノとの関係を考えると、保育者は環境構成としてどのようにモノを準備するかといった一方の捉えになってしまっていることが多い。人と同様に、子どもとモノとの双方向の関係を考えていくことは、環境への捉えや保育者援助、さらには子どもへの新たな見方を広げていくことになる。本研究の最初の成果として、子どもがモノをケアしながらどのように自分の世界を広げていくのか、また、そのために保育者がどのように子どもの育ちをケアしていくことが必要なのかを、3つの視点から検討することができた。

赤ちゃんとモノとのかわり

ノディングズ(1997)は、ケア概念の中心に「受容性」をあげ、ケアを人間以外の事物や観念にまで広げた。モノをケアするということは、モノの世界を受容しながら、わかっていくことである。それが、モノの声を聴く「モノとの対話」であり、そこには「驚き」が存在している。特に、赤ちゃんにはモノと出会い、モノにこだわり、多様にモノとかかわる中でモノを知り、そのモノとのかわりから自分を知る姿として発達を新たに捉えうることが見出された。また、そのような赤ちゃんの「モノとの対話」が成り立つ保育の場には、そのプロセスを驚きをもって共感する保育者のかわりがみられた。

自閉傾向のある子どもがケアする世界

自閉傾向のある子どもがケアする世界に焦点をあてたとき、モノに関心を持ち、モノへのケアがなされる世界が見いだされた。そして、そのモノへのケアの世界の中で、周囲の子どもや保育者とのかわりが生まれ、それが双方向的なケアのもと育ち合いにつながっていくことが考察された。

モノとの対話から広がる遊び

保育の場で子どもたちの遊びをみると、とかく、無意識のうちに、子どもたち同士の関係がどのようにつながり、広がっていくかという人とのケアに注目しがちである。けれども「モノへのケア」という視点からは、まずモノとの対話の世界を広げている

子どもたちの姿が見えてきた。そして、そのような子どものモノへのケアに注目し、その子どものモノへのケアを保育者や周りの子どもたちが気づきケアするとき、遊びの広がりや子どもたちの関係は、今まで見えていたプロセスとは異なる、モノも含めた多様な関係的な構造を見出すことができた。

保育実践現場では、人とのかわり、仲間関係の形成を急ぐあまり、一人でモノに向き合う子どもを「みんなと遊べない」子どもと捉えて問題視してしまうことも少なくない。しかし、子どもはモノへのケアを通して、モノを「わかって」としていくと同時に、自分を「わかって」としていく有能な存在であった。だからこそ、子どもが夢中になってモノをケアする世界に信頼を寄せ、認め、十分な時間や場を保証していくことが重要となる。

(2)モノ的なケアと人的なケアの関係性

モノや人へのケアがどのように相互にかかわり合いながら、遊びが生まれたり、広がったりしていくのか、その中で子どもたちのかわりはどのように変容して行くのかのプロセスをたどりながら、保育者の援助の在り方を主として2つの事例を通して行った。

人とのかわりが困難だった男児K男

周りの子どもよりひとまわり身体も大きく、衝動的な行動が目立つK男は、入園当初からモノや場に強くこだわった。力尽くでモノを奪ったり、自分の思いが通らないと手を出したりすることも多く、周りの子どもたちから怖がられる存在になっていた。反面、K男は一人で夢中になってモノとかかわり、その発想やエネルギーには目を見張るものがあった。

【エピソード1】K男の遊びの魅力からのかわりあいの展開

K男は築山からどろどろ水を流すと、斜面の土が泥状になっていくことに気づき、足でなぞる。次に、手でなぞってこねると土がドロドロになっていく。すると今度は、K男は、斜面を滑りだす。その様子を見ていた子どもたちがやってきて、一緒に滑り出す。O男が斜面を滑ったあとポーズをとると、それを見ていたK男も同じようにポーズをとり、O男と視線を合わせて笑う。K男が水を汲んできて斜面から流し出すとO男や周りの子どもも同じように始める・・・途中、K男は滑る順番でトラブルになりそうになったのだが、互いの存在を意識して順番を守った。K男が、友達と同じ場でトラブルもなく30分以上遊べたのは初めて

だった。

この【エピソード1】で、K男は土の変化を受け容れながら、土の性質を「わかって」としていった。そして、土への自分の働きかけを変化させていた。そこには、K男が土と対話しながら土をケアする世界があった。

また、周りの子どもたちは、K男のモノへのケアや、そこから生まれた遊びの面白さを感じ取り、認めていた。だからこそ、K男の場にやって来て、同じ場で一緒に動き始めていたのである。

そのような場の中で、K男はモノとのかかわりだけではなく、O男の動きに目を向け、真似し真似されるといふかかわりから友達に関心を持ち始めた。そして、同じ場で友達と同じ動きをすること、共振し合う面白さが、順番を守る規範をも生み出しているように見える。それは、ルールを一方的に教えられ守られるのではなく、K男自身が仲間を見いだし楽しむ中で、順番を守り、友達と遊べる自分に出会い、自分を「わかって」としていくことにつながっていったように捉えられた。

自閉傾向のある子どもがケアする世界

2年保育で入園したTは幼稚園生活が始まると園内の扉や窓の開閉をひたすら続けたり、三輪車にまたがり園外へと出て行くことを繰り返したりするなど、自閉症の行動特徴が見られた。保育者がバス停の名称をつぶやきながら扉の開閉を続けるTに「バスごっこ」をしようと誘ってもTは一切、反応することはなく、保育者はTとどのようにかかわればよいかわからなくなり、Tが危険なことや他児の園生活の妨げになるようなことをした場合にそれを制止するということができなくなった。しかし、「何をしようとし、何を楽しんでいるのか」という視点でTの行為を見ることで、T自身がケアする世界が見えてきた。それは「モノ的世界」の探究であった。

【エピソード2】Tが楽しむ「モノ的世界」

Tと二人でグラウンドへ行く。Tがグラウンドでボールを見つけ、ボールを蹴りながら走り始める。そこで、私（保育者）はTが蹴ったボールを手に取り土がもってある小高い丘に向かってボールを投げ、ボールが丘を転がり落ちてくるところをTに見せる。すると、Tはとても喜び、自分でも私と同じように丘に向かって何度もボールを投げては転がり落ちてくるボールを楽しそうに追いかける。

この【エピソード2】において、Tは、ボールの「動き」を楽しんでいる。そしてそのことを保育者も楽しんでみようとした行為に、Tが「共振」してくれたと考えられる。Tがボールを蹴り始めると、さらに保育者は新たなボールの動きを示した。すると、Tは保育者を模倣し、「ともに」ボールの動きを楽しむ遊びが展開した。これより、保育者がTの「モノ的世界」の探究を理解し共にしようと「モノをケアする」世界に、Tが参加することによって、「ともにモノをケアする世界」が展開していた。

「モノ的世界」に問いが生まれる

これまでTにとって「モノ的世界」は「扉が開ければ移動する」というように「If A then B」という原則で成り立つ自明の世界であった。ところが、「モノ的世界」の探究を共にする保育者が出現したことで、モノ的世界に新しい「If X then C」という（やはりモノ的世界に加わる）新しい展開が保育者というヒトの介入で生まれること、さらにその「ヒト」とともにその世界を楽しむという、新しい「ヒト-モノ」世界の楽しさ、心地よさを経験したと考えられる。そこから、Tの抱く「モノ的世界」において、Tはヒト的かかわりの存在に触れ、「モノ的世界」で自己完結していた世界が崩れて、「If A then B」の原則だけでは捉えきれない、ヒトと「共にする」という異なる意味の介入を楽しめるようになった可能性がひらかれた。

「人へのケア」の芽生え

これまでTは年少女児のMのところへ行ったりはMの頭を叩いたりしていたが、保育者が制止してもやめようとはしなかった。ところが、TはMの泣く姿を見てハッとした表情を見せたときから、Mを叩くことをやめ、保育者が促した通りにMに「ごめんね」と言ったり、Mの頭を撫でたりするようになった。これより、TのMへ「モノ的に」かかわっていたことから脱して「人へのケア」へと拓かれていく可能性を確認することができた。

これらのエピソードを基盤に、モノへのケアが、単にモノとのかかわりあいを深めるだけではなく、人とのかかわりあい（人へのケア）を生み出すきっかけとなるプロセス、そしてそのプロセスは一樣ではないことが見出された。

(3)二人称的かかわりあいの持つ意味

佐伯（1995；2014）の「学びのドーナッツ論」によれば、一人称の学び手であるI

(私)が、三人称的他者世界である、they世界、すなわち現実の社会、文化的実践の世界の認識を広げ、深めていくときに、必然的にyou的世界、二人称的世界とのかかわりあいを経由する。例えば、赤ちゃんは、母親というyouと出会い、二人称的世界を持ち、広げていくことで、現実の社会や、より「よい」ものを生み出していく文化的実践に参加していく。また、学びのドーナツ論では、youとは人とのかかわりだけでなく、モノとのかかわりも含まれる。この認識を広げ、深めていく、「世界を知る」プロセスにおいて、二人称的世界(レディ, 2008/2015)の重要性を具体的エピソードから明らかにし、「子どもがケアする世界」への理解と、知の捉え方の変換の重要性、さらにそのプロセスへの援助の可能性を指摘した。

【エピソード 3】三人称的かかわりによる修了式

小学生のA君は普通の授業のほとんどは特別支援学級で過ごしていたが、行事や学期の節目には普通学級に属して子どもたちとの交流を持っていた。

修了式が近づき、A君も普通学級に入って修了式の練習が始まったが、A君は前後の子どもと適当な距離を保って入場、退場することができない。そこで、特別支援学級の担任の先生は、A君と自分を紐で結び、二人の間の紐がぴんと張るようになる練習を繰り返した。

練習のかがいがあり、修了式当日、A君は前後の子どもと距離を保って式場への入退場を行うことができ、担任も、校長も教育委員会からの来賓も、そして保護者も、「みんなと同じことができた」と喜んだ。

【エピソード 4】二人称的かかわりあいによる修了式

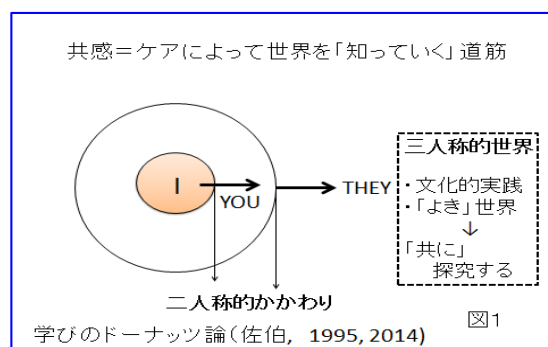
修了式当日の朝、Rは、子どもたちが式の会場へ向かうため集まりはじめると「せんすいかん」と言って「せんすいかん」を作るために必要な画用紙、クレヨン、ハサミを探し始める。クレヨンの代わりに色鉛筆を用意するとそれらをもって一足早く式場へ向かい扉の前で立ち止まり待つ。そこへクラスの子も子どもたちが到着すると、Rはその列に入り一緒に入場する。厳かな雰囲気の中で式が始まる。Rは隣に座っている私の手に色鉛筆を持たせ、細い横長の円を描くようにせがむ。私はRの望むように形を描き、窓をつけ、それをハサミで切るとRはいつものようにそれを「せんすいかん」と呼び、手に持ち、立ち上がって後方の保護者席の父親を確認したりするが、式の進

行状況を感じながら他児と同じことをしようとする。証書授与になり他児が名簿順に舞台にあがると「Rくんも」と言い、行こうとして立ち上がる。そこで私が担任に合図を送り、順番を待つ他児に頼み、Rを先に入れてもらう。Rは一人で舞台にあがり証書を受け取る。席に戻ったRは証書を眺め一文字ずつ指で追いながら「なに」と聞くので私が読む。その後、式場に響く歌声に耳をふさぎ一度は式場を出る。しかし、落ち着くとRは再び式場へ戻ろうと私の手をひく。

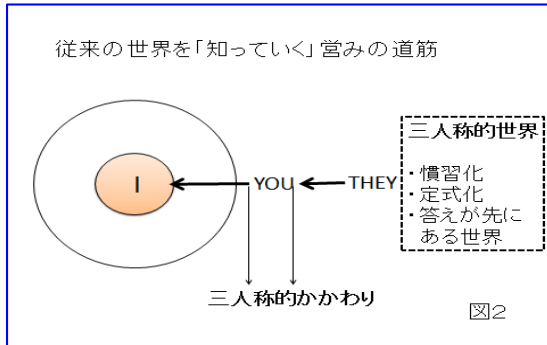
【エピソード 3】では、修了式という厳粛な場でトラブルが生じないように、A君が皆と同じように行動できるような行動の練習を行っている。A君がどう理解するかより、その場でトラブルとならない行動をセッティングした例として捉えられる。

一方、【エピソード 4】はRとの二人称的かかわりが基盤となり、Rの行為から生じる「想定外」的なできごとを、「想定外」やトラブルと捉えるのではなく、周辺の子もも担任も、その都度的に受け入れ応じることで「トラブル回避」でなく多様な在り様が「公的」になるという、「二人称の三人称化」の例として捉えられる。【エピソード 4】において、RはRらしくありながら、周りに受け容れられ、Rもまた自分なりに周りに、そして、修了式にかなうかたちで参加しようと試みている。

このように、ケアとは対象の世界を受容しながら、対象を「知る」という営みであり、それは、対象に親しみを持って共感的に知る「二人称的かかわりあい」によって可能となる。人は「共感」、つまり、ケアによって世界を「知っていく」のである(図1)。



しかし、【エピソード 3】に見られるように、従来の対象を「知る」営みとは、慣習や定式、答えが先にある、それを子どもに一方的に「知らせる」「訓練する」のみになっていることも多い。そこにはケアは存在しない(図2)。



つまり、「三人称的世界」とひとことでも二つの道筋とありようが見出された。ひとつは、理解せねばならない三人称的世界が、あらかじめ存在し、答えが先にある三人称的世界の基準から出発し、その視点による三人称的なかかわりによってかわる、すなわち、保育の場であれば、子どもに対してこうあらねばならない三人称的世界の基準に従い、一方向的にケアする保育のありようである。もうひとつは、二人称的なかかわりあいを通してみえてくる、子どもたちも保育者もともに探究する THEY 世界、三人称世界が存在する双方向的な保育のありようである。

保育における新たなケアリング論の基盤はこの二人称的なかかわりあいを通してともにケアしあい探究していく関係構造をもとに築かれる可能性を見いだすことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計5件)

林浩子・宇田川久美子・岩田恵子・佐伯 胖．子どもがケアする世界をケアする：二人称的／三人称的のかかわり．日本保育学会第68回大会．2015年5月10日．椋山女学園大学(愛知県名古屋市)．

Iwata, K., Udagawa, K., & Hayashi, H. Caring and dialogue between children and the world: The developmental processes of play. 4th International Congress of the International Society for Cultural and Activity Research, 2014年9月30日．Sydney Australia

林浩子・宇田川久美子・岩田恵子・佐伯 胖．子どもがケアする世界をケアする：遊びと人的／モノ的のかかわり．日本保育学会第67回大会．2014年5月18日．大阪総合保育大学(大阪府大阪市)．

宇田川久美子・林浩子・岩田恵子・佐伯 胖．子どもがケアする世界をケアする：自閉傾向のある子どもと人的／モノ的のかかわり．日本保育学会第67回大会．2014年5月18日．大阪総合保育大学(大阪府大阪市)．

林浩子・宇田川久美子・岩田恵子．子どものケアする世界をケアする．日本保育学会第66回大会．2013年5月12日．中村学園大学(福岡県福岡市)．

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田 恵子 (IWATA, Keiko)

玉川大学・教育学部・教授

研究者番号：80287812

(2) 研究分担者

林 浩子 (HAYASHI, Hiroko)

立教女学院短期大学・幼児教育科・准教授

研究者番号：00587347

宇田川 久美子 (UDAGAWA, Kumiko)

相模女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：90513177